

令和7年度 第1回 匝瑳市有機農業推進協議会 議事録

開催日時
令和7年5月20日（火） 13:30～15:30
開催場所
市民ふれあいセンター 2階 視聴覚室
出席者
（会員） 佐藤 真吾 農事組合法人 栄営農組合 理事 佐藤 真吾 株式会社 匝瑳おひさま畑 天久 笑 Three little birds 合同会社 天久 笑 千葉県海匝農業事務所 改良普及課 匝瑳グループ 主任上席普及指導員兼グループリーダー 清宮 宏貞 上席普及指導員 益子 尚道 匝瑳市学校教育課 学校給食センター給食班 福岡統括 （オブザーバー） 公益財団法人自然農法国際研究開発センター 理事 榎原 健太郎 （事務局） 農林水産課農業戦略室：熱田室長、木内主査補
欠席者
ちばみどり農業協同組合 営農センターそうさ

会 議 内 容
1 開 会 熱田室長が開会を宣言。
2 室長あいさつ
3 議 事 議事に先立ち、事務局及び参加者の自己紹介を行った。 なお、議長役を務める会長等選出前であるため、事務局が進行を務める。 （1） 会長・副会長の選任について 委員の欠席を考慮して、会長等の選出は次回に持ち越しとし、今回は引き続

会 議 内 容

き事務局が進行を務める。

(2) オーガニックビレッジについて

(3) 有機農業等の推進に関連する制度・補助金等について

各議事は相互に関連があり、説明事項であるため、一括議事とした。

資料に基づき事務局から説明した。

(4) 令和7年度 有機農業推進事業について

資料に基づき事務局から説明した。

(5) 意見交換

これまでの議事や説明を踏まえて意見交換を行った。

《会員》

有機農業推進事業の実施主体は、この協議会ではなく、市ということによいか。

《事務局》

そのとおりである。本協議会は、国のみどりの食料システム戦略推進交付金事業で言うところの「検討会」としての位置づけであり、実施主体はあくまでも市である。事業実施に当たって、ご意見やご協力を頂きたい。

《会員》

協議会や事業に関わる生産者は、ほかにもいるか。

《事務局》

今後、拡大していきたいと考えている。本市には有機農業に取り組む生産者が多数いらっしゃるが、協議会の立ち上げに当たっては、国庫補助事業である環境保全型農業直接支払交付金事業に取り組む生産者・団体にお声がけし、佐藤氏、農事組合法人 栄営農組合、株式会社 匠瑤おひさま畑、Three little birds 合同会社にご参加いただいている。

その他の農業者や関係者に対しても、今後、事業に取り組む中で周知や呼び掛けを行い、参加者を増やしていきたい。有機農業者だけでなく、環境配慮型農業に関心のある慣行農業者にもご参加いただくことで、取組の裾野が広がるし、有機農業への参入にもつながる。

本事業は、生産・流通・消費の各フェイズでの取組を推進するものなので、多様な主体の巻き込みを図る必要がある。有機農業の産地づくりを宣言する「オーガニックビレッジ宣言」は、その足がかりになると考えており、事業及び協議会の拡大や、宣言そのものが農業者への応援にもつながると考えられることから、年内には有機農業実施計画を策定し、宣言を行いたい。

《会員》

協議会の名称が「有機農業推進協議会」となっている。環境保全型農業の裾野を広げるという意味では、有機に限定せず「環境農業推進協議会」という名称でもよいのではないかと思った。

《オブザーバー》

他の地域では、果樹栽培が盛んである等の地域特徴への考慮から、「有機農

会 議 内 容

業」という表記を使いにくいところもある。こうした地域では、「ゆうきの里推進」や「循環型」「持続的」等の言葉を使っている例もある。

《会員》

学校給食での有機栽培米の取組が位置づけられている。これまでも有機米を提供してきた生産者としては、もっと有機米生産を増やして、いすみ市等のように、学校給食における有機米使用割合を100%にしたいという思いがある。世田谷区にも有機米を提供しているが、自治体として給食活用の方針が明確であれば、生産者は有機米の栽培にも前向きに取り組むことができる。また、有機米の給食提供をきっかけとした交流等ができるとうい。

《事務局》

有機米は、生産量・供給量や、仕入れに当たってのコスト面が課題であると思う。米不足や価格高騰が取り沙汰されているところだが、この点を含めて学校給食センターではどうか。

《会員》

もともと有機米は慣行米と比較して価格が高いが、昨今では米自体の値段が高騰している。状況を注視したい。

《事務局》

海匠農業事務所企画振興課の担当者と話をしたときのことだが、有機農産物は慣行栽培品よりも高値で取引される傾向があるが、現在の米価高騰状況においては、慣行米の価格も上がっているため、今の状況だと経営面でのメリットが希薄化してしまうのではないかと懸念していた。

《会員》

まさにそのとおりで、これまでは販売価格の優位性をアピールしやすかったが、今はタイミングとしては良くない状況にある。

また、価格が高騰し続けると、消費者が米を買えなくなってしまう。こうした状況がいつまでも続くものではないと思うが、そこに輸入米が入ってきて、消費者が外国産の米を買うようになってしまったら、ますます米作りは大変な状況になってしまうのではという危機感がある。

《オブザーバー》

以前は、慣行米が300円/kg、有機米が500円/kgであったが、今は慣行米は800円/kgを超えている。もちろん、農業資材等も高騰傾向のため、生産者の再生産に見合った価格になるのは良いことだが、今の状況は生産者から離れたところでの出来事であり、生産者の経営に寄与していない。

《事務局》

以前、自然農法センター専門技術員の三木氏と打ち合わせを行った際に、「有機栽培は、特殊な栽培方法であると思われがちだが、実際は当たり前の基本技術の積み重ねが殆どであり、このような技術は慣行農法にも活かすことができる」とのコメントを頂いた。稲刈り後の秋処理等のことだと思うが、実際のところはどうか。

会 議 内 容

《会員》

他地域で有機農業に関わったことがあるが、やはり雑草との戦いであった。除草剤を使用しないため、稲と雑草が半々ぐらいの状況になっていたところもある。そこでは紙マルチを使って対策を行っていたが、コストもかかるし、途中で破けてしまい再セッティング等の手間もかかっていた。

《会員》

紙マルチで雑草を押さえるやり方だと思うが、有機農業では土づくりや水のコントロール等を通じて、雑草が悪さをしにくい環境を整えることが重要である。やるべきタイミングにやることをやるだけで、目に見えて状況が改善されることがある。そうした点も紹介していきたい。

《会員》

畑作においても、肥料の値上がりに苦慮している。佐藤氏のところでは、高温障害はどうか。麦・大豆は、高温障害の影響で収量が減少している。

《会員》

影響は大きい。今の米は、どれも収量が取れる品種のはずだが、高温障害により実入りが悪くなり、歩留まりが落ちている。先日、いすみ市の担当者とも話をしたが、コシヒカリに実が入っていないとのことだった。今後は高温環境に対応した品種に切り替えていく必要があるかもしれない。自分のところではコシヒカリを作らなくなった。

話は変わるが、有機農産物については、販売に困っている生産者も多いので、流通面での情報も得られるとよい。

また、有機農業では化学肥料が使えないため、規格に適した肥料の確保に苦慮している。安心して使用できる肥料が求められている。この点、臼杵市には公設の「土づくりセンター」があり、有機農業にも使用できる完熟堆肥を提供している。市内には畜産農家も多い。畜産堆肥を有機農業に用いるためには、一定の基準をクリアしなければならないなどの課題もあるが、取組を通じて、畜産農家との連携や循環型の仕組が進むとよい。

《会員》

水稻栽培で堆肥を使う時期は、年に2回程度と限られている。他方、畜産農家では、家畜の排泄物を貯蔵・堆肥化するためのスペースがない点が課題である。

《会員》

自社生産の有機栽培大豆を使用して、オイルや味噌等を作っている。学校給食で使用してもらえるとよい。

《会員》

現在も、学校給食で有機栽培の大豆と米を使った味噌が使用されている。

《事務局》

学校給食での有機農産物の活用について、米は慣行からも切り替えやすいが、野菜等は規格やオペレーションの観点から課題が多いため、他地域では、

会 議 内 容

調味料を有機のものに転換するところからスタートしているところがある。

《オブザーバー》

市内では玉ねぎや人参は作られているか。給食で使われる野菜は「いも・たま・にんじん」が代表格である。他の地域では、鶏糞や緑肥を使用しながら、有機で2～3ヘクタール規模で営農しているところもある。

《会員》

市内は砂地が多いため、あまりない。人参は、水が確保できないところでは作りにくい。路地野菜は、長ねぎがほとんどである。

《オブザーバー》

葉物野菜は、給食で使うところは少ないが、料理屋や居酒屋等に販売している生産者もいる。

《会員》

葉物は長持ちしないため、出荷時期から逆算して計画的に栽培するやり方だと聞いている。

《会員》

地域イベントの出展については、開畑ソーラーシェアリング収穫祭とそうさ農業まつりの2つが計画されている。日程が重複しないか。

《事務局》

そうさ農業まつりは、11月の第二日曜日であり、ソーラーシェアリング収穫祭はその前の週であったと思う。何をやるかはこれからになるが、ブース等で取組を発信・周知したいと考えている。

最後に、有機農業を推進していくに当たり、有機農業の良さや魅力、メリットとはどのようなものだと思うか。環境面だけでなく、経営面に関してや、大事にしていることでもよい。

《会員》

市場価格の影響を受けにくく、有利販売や安定した経営が見込めるという点はメリットであると思う。

また、化学肥料は、化石燃料や鉱物資源から製造されており、輸入に頼っている。そうしたものに依存していてよいのかという思いがある。加えて、化学肥料により地力が消耗すると、農産物の品質や収量も低下してしまい、持続的な農業は難しくなる。これを化学肥料でカバーしようとする、コストも増大する。

有機農業に限ったことではないが、環境負荷を低減して、土を良くし、農産物を良くすることで、持続的な土地利用や農業経営に取り組むことができ、豊かさを次世代につなげていくことにもなると思う。有機農産物が美味しいというのは、主観的な要素なのかもしれないが、化学肥料だけの栽培よりも良いものが作れるという手応えも感じている。

また、農薬使用量を減らすことは、経営コストの削減にもつながる。今は、次から次へと新しい薬剤が開発・発売されており、いちごで際限が見え

会 議 内 容

ない。農薬開発も必要なことだと思うし、否定するつもりはないのだが、一方で、農薬や肥料を削減するための代替技術や製品の開発がもっと行われてもよいと思う。生産者が安心して農薬等を減らすための仕組みが必要である。

《事務局》

今の話を別の観点から整理すると、環境にやさしい農業を通じて、経営資源である農地を大切にすることで、持続的な農業経営や、製造原価の削減にも寄与するということでもあると思う。

また、自分も「単に有機農産物だから美味しい」という考え方には懐疑的だが、自然農法センターの三木氏の YouTube 動画では、有機栽培の水稻は慣行農法のものと比較して、根伸びが良くなっていると解説されていた。これが美味しさや栄養価に直結している要素なのかはわからないが、栽培方法が生育に影響していることを明示するものであると思う。

技術開発について、最近はスマート農業の活用も進んでいる。4月に開催された関東農政局のみどりの食料システム戦略研修では、「雑草対策用アイガモロボ」が紹介されていた。先日、メーカーのホームページを覗いたところ、今年度分はすでに完売していた。こうした機械等の開発・普及が進むと、有機農業の負担軽減にもなると思う。

《会員》

農薬を使用しないことで、まず、自分自身が健康でいられるのではないかという思いがある。ハウス内で防護服を着て農薬を散布したことがあるが、過酷な作業だった。農薬を使わない営農が合っていると感じている。

《事務局》

有機農業が注目されているが、一方で、有機農業の拡大に伴い、農産物の価格上昇に伴う消費者負担の増加や、食料自給率の低下等を懸念する意見も見受けられる。こうした点についてはどう捉えるべきか。

《オブザーバー》

慣行農業と有機農業を、対立的に捉える構図は最も良くないと思っている。それぞれの特徴やメリットがある。

例えば、化学肥料や化学合成農薬は、大きな面積での大量生産や低コスト化に寄与している。一方で、中山間地域等の小規模な産地、里山の営みが残っているようなエリアや、住宅地と面した農地では、そのような大規模化や農薬使用は困難である。環境に配慮した農業を通じて、こうした地域の特徴に応じた持続可能な農業や付加価値を生み出すことができる。

また、先ほどの天久氏の話でもあったが、例えば、柔軟剤の匂いが苦手という人もいるように、生活や生産の中で化学物質を避けたいという人もいる。

国において、慣行農業からの転換ではなく、耕地面積のうち 25% という目標を掲げているのは、こうした状況も考慮してのことだと思われる。

《会員》

慣行と有機のどちらか一方ということではなく、選択肢の一つとして捉えれ

会 議 内 容

ばよいと思う。

《事務局》

産地や消費者等の多様な特性やニーズにマッチした取組が重要だということだと思う。本事業は、有機農業の推進を通じて、慣行農業との調和や地域農業全体の活性化を図ることを掲げている。今の話を念頭に置いて事業に取り組みたい。

(6) その他

《進行》

事務局から何かあるか。

《事務局》

市では、情報提供の一環として、審議会等の議事録を市ホームページで公開している。本日の会議の議事録等についても、後日参加者の皆様に送付するとともに、市ホームページで発言者氏名を「会員」等として内容を公開する予定なので、よろしくお願いします。

次回の会議は、令和7年6月10日（火）に開催予定である。詳細は後日通知するので、よろしくお願いします。

4 閉 会

熱田室長が閉会を宣言。